



アワーミュージアム

第27号 2005年2月28日発行

県内に風力発電施設が増えます

いちほら しんいち
市原 眞一（友の会会員）

徳島市から西南の方向に見えるひときわ高い山（旭ヶ丸 1019.5 m）の山頂付近に、「夢風車」という風力発電施設があります。この周辺は大川原高原ゆめふうしゃと呼ばれる牧草地で、夏には牛が肥育のため放牧されています。しかし、夏期以外の自然環境は厳しく、特に風は年中強くて、霧で山頂が見えない日も多くあるし、冬は積雪もあって、放牧地が雪で白く見える時は道路が凍結しています。ただこのような気象条件のおかげで、風力発電には非常に適しているらしいのです。

今、高原りょうせんに設置された位置から東の稜線にかけて、現在ある夢風車の他に、更に大型の風力発電施設が作られようとしています。計画はすでに進行していて、次年度には工事が始まり、やがて十数基の風車が完成する予定です。

風力発電は、太陽光発電とともに環境に配慮されていることから、国の方針によって現在盛んに

各地で作られています。県内ではまだ設置数も少なく珍しいようで、大川原高原にはアジサイとともに名所として多くの観光客が訪れています。

風力発電の良い点は、火力や原子力発電と比べると空気を汚さないこと、無限に吹く風を利用するために燃料代もかからないことです。

悪い点には、騒音や振動問題があります。また、風が吹かないと発電しないこと、作られた電力は地元で使われることなく遠隔地へ送られてしまうといったところです。

大川原高原を訪れる方からは、風景が変わるとい声も聞きます。

これらの善し悪しについてですが、大方の人に対して、山の上にあることで音や振動の影響はありませんし、風景もやがて見慣れてくると気にはなくなるでしょう。遠く離れた場所にある発電施設ということで、人々の生活には関係ないと思われがちです。

しかし、もともとそこに棲んでいる生き物たちにとってはどうでしょうか？現に北海道（数十基



風力発電施設「夢風車」



風車のある大川原高原



風車が連立する風景（想像）

の風車が連立するところ)では、ワシの体が真っ二つに切断されていたという報告があります。バードストライクと呼ばれるこの事故は、モーションスミア現象(ある一定以上の速度になると網膜が処理しきれなくなる)によるもので、鳥の目には回る風車のハネが見えていないそうです。大川原高原にある夢風車では、建設直後にはあれほど居たシカが、放牧場内でツノを落とす数が減ってきたように思えます。その後シカは放牧場内に帰ってきていたので安心しましたが、何らかの影響はあるかもしれません。

問題点は数多く(大きさ=自然にある木の高さなら問題とならない・集中=バリアのような役割を果たす・間接的な被害=渡り鳥が今までのコースを替えるなど)あるようですが、そこにいる生き物に対してちょっとした配慮(高さを抑える、生き物の通り道を外す)や工夫(風車のハネに色を着ける、形状を変える、新型では騒音が軽減されている)で、人間以外の生き物たちにもやさしい風力発電施設としてほしいものです。そして設置の前後には、開発側・保護側の両者とも調査や研究を十分に行って、情報の交換や共有化を進めていくべきで、事故が起こらないような最適な手段を考えることは必要でしょう。

友の会行事報告



日帰り研修を終えて

いずみだに としこ
○泉谷 淑子(友の会会員)

11月28日丑三つ時?まさかそうマサかです!ネゴウのオンナと言われる私が、目が覚めてしまって眠れないんです。マサニ鬼の^{かくらん}霍乱が起こったとしかいえません。ソソクサト身づくろいをして、主人の車で出発。途中、国道55号線はもう思っていたよりたくさん車が走っていました。やがて冷田橋を左に車は文化の森へ。駐車場には、はや数台停まっていた。笑顔で数人の方に挨拶をいただきました。すぐバスが到着・乗車・発車。車が走り出し、少し落ち着いた頃、少し目を覚まし、今日の行先の「かやぶきの里」ってどこにあるの?その疑問はいただいた資料ですぐ解決しました。やがて鳴門海峡を渡るときふと気づきました。運転の上手なこと!安心すると同時に睡魔が襲ってきて、夢うつつで車外の紅葉etcを。

最初に車を降りると、^{なが}眺めの素敵なお食事処。食べ始めてスグどなたかが

「この刺身、川魚?」

という声。エ!ウソー!箸が止まった。スグお店の人に聞く。

「カンパチです。」

新鮮なカンパチは即、口の中へ消えていった。川魚の生はコワイデス!やがてバスは目的のかやぶきの里に到着。記念写真を写し散策。途中お茶をいただけるお寺発見。即、門を叩く。写経も……

最後のお寺を見学してバスに乗ろうとすると、さっきのかやぶきの家のお茶を出してくださった奥さんが、犬の散歩がてら見送って下さいました。トツテモ楽しい有意義な一日でした。企画をしていただいた皆様に感謝!感謝!感謝!

くわうち たかし
○桑内 隆（友の会会員）

先日は大変お世話になりました。京都市内は何度か訪れましたが美山町は初めてでした。日帰りでの長時間バスには少々まいりましたが「かやぶきの里」には感心しました。「自分たちの生活の伝統文化」と「町づくり」を巧みに結びつけ成功させている好例だと思いました。

このためには町はもちろんですが、町民の方々が地域の自立を自らの課題として努力した結果だと思えます。

おおた はるえ
○太田 春江（友の会会員）

先日は待望の美山町行きに参加させてもらってありがとうございました。茅葺き屋根の維持など具体的にお話を聞き、生活をひとつひとつ丁寧に過ごしてきたひと昔前の人々の暮らしにとっても懐かしい気持ちと、失った現代の生活との違いを感じました。

大福光寺の仁王像や三十六歌仙の板絵、方丈記の写本と、博物館ならではの行事で、只の観光ではないのがとても良かったと思います。これからもひと味違った行事を期待しております。

ばんどう なおみち
○坂東 直道（友の会会員）

重要伝統的建造物群保存地区の見学ということで、飛騨白川郷をイメージして向かった。距離的には祖谷以上の辺地で点在集落を道中想像した。

着いてみると、山裾の斜面に厚いかやぶき屋根の民家が40戸ちかく狭い庭を挟み集落化していた。ガイドの説明を聞きながら民俗資料館に入った。母屋・納屋・土蔵・屋根裏と順路に従い見てまわった。生活用具・農具等の中には子どもの時に使った用具等も展示されておりとても懐かしかった。また、第二次世界大戦

後の著しい社会変化を再確認した。

その後、稲荷社・善明寺・鎌倉社・知井八幡宮と、駆け足でまわったが欲張りすぎて疲れてしまった。

帰途、渡辺家、大福光寺を見学した。文化財の保存も大切だが指定する以上は、保存・維持のための国や県の手厚い助成措置が必要だと痛感した。文化行政に投資を惜しんでは国の発展は考えられないと思っている。

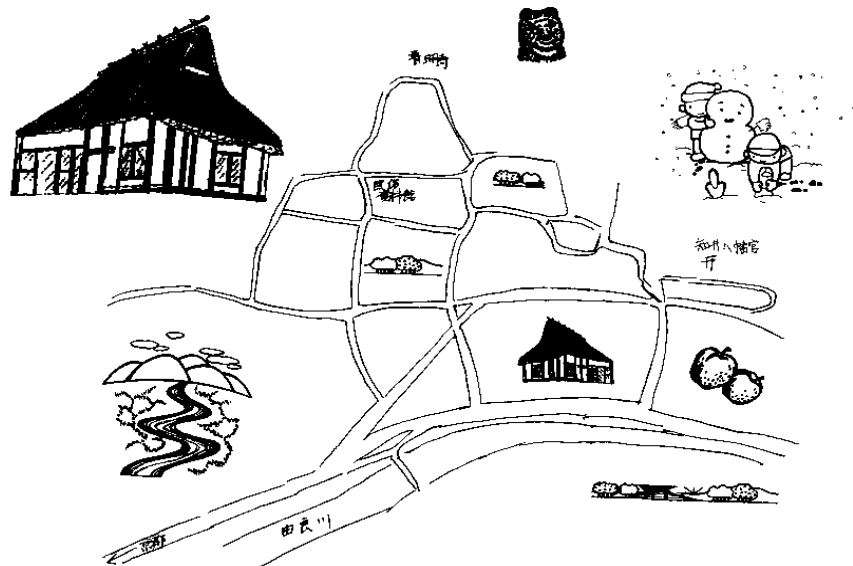
ただ しげとし
○多田 重利・かずみ（友の会会員）

先日は「かやぶきの里」研修会の写真などをお送りいただきありがとうございました。

研修会当日は、絶好の行楽日和にめぐまれ、晩秋の丹波路を心ゆくまで堪能することが出来ました。

広々とした田畑の向こうに、紅葉と緑の樹林がおりなす山の色彩を背景にかやぶき屋根の密集した光景が目に映りました。まるで江戸時代にタイムスリップしたような、あるいは郷愁を誘うなつかしい田舎の風景に出会ったような感覚を覚えました。

また、渡辺家住宅や大福光寺の見学も良い勉強になりました。いろいろお世話いただき感謝しています。



美山の地図

博物館紹介 25



三木文庫を訪ねて

なかがわ ともこ
中河 朋子 (友の会会員)

屋敷の白壁が薄ら陽を返している。俳句の先輩方とともに、三木家の正門をくぐる。広い庭は松の手入れの真っ最中。18人の庭師が10日かかっての作業だという。初冬の空に銚子の音が響く。庭の3箇所には井戸の跡。昔から大勢の使用人が暮らしていた様子が伺える。ぐらりと屋敷を回って裏庭へ。裏門は水路に面しており、鰻をとる舟が2艘、葦の向こうに浮かんでいる。かつては、ここより藍の取引が行われていたのだ。

屋敷を一回りした後、敷地内の三木文庫に入った。松茂に引越してきて10年になるが、大きなお屋敷を外から眺めるばかりで文庫を訪ねるのは初めてだ。ここには三木家の歴代事業の資料が集積されている。パンフレットによると、三木家のご先祖が阿波国の中喜来浦に移り住み、阿波藍の取り扱いを始めたのが1674年。以降、「江戸売りの藍師」として名を馳せたらしい。三木家は藩の財政にも関与し、大庄屋も勤めた関係で、文庫には阿波国の庶民資料が多く保存されているという。そのような貴重な財産がすぐ近くにあったとは。

館にはいるとすぐ、家紋の鎧兜が据えられている。手前には大阪冬の陣の挿絵。この絵の中の、卍



三木文庫

の紋の蜂須賀家の傍、三木家のご先祖様がいらっしやるという。

館内真正面には、鳳凰風な鳥を見事にデザインした藍染めの布が掲げられている。動物や植物の染料も駆使した華やかなこの布は、嫁入りの布団生地として使われた。虫がつかない、病気にならない、藍独特の天然防虫効果を持つ、上等の布団。こういう物こそ、アトピー性皮膚炎に悩む次世代の子どもたちに伝えていきたいものだ。

300年以上前より阿波の地に始まったという藍作りは「暴れ川」と異名を持つ吉野川沿いに盛んになった。暴れ川は、氾濫し家々を奪う鬼でもあり、肥沃な土を運んでくれる神でもあったのだ。洪水の被害と背中合わせに栄えた阿波の藍産業。館内には、藍の種類から始まり、藍作りの工程、道具一式、染型、布などが展示されている。藍玉買入帳、積出帳、仕入帳など、数10センチもある分厚い大福帳も紙縹で綴じられ、ぎっしり並んでいる。そのうちの一冊のたった一行をみても、千両、二千両の取引だ。千両といえば今の約4000万円に相当するから、取引の総額を想像するだけでも気が遠くなる。「金懺長者鑑」にも三井、住友、岩崎家と名を連ねる儲けに対して、三木家は勝海舟より「天半藍色」という言葉を賜ったという。

「空一面を藍で染めてはいけない。儲けは腹八分目にしておきなさい。」

という意味だそうだ。この言葉を言った人も、この言葉を理解しこれに従った人も賢い。代々の反映の所以だと納得。

館を更に進むと浄瑠璃人形の数々。人形衣装の金の刺繍が眩しい。それに続いて東京出張の際に故郷に送ったという錦絵、瓦版などの展示。当時の世相がありありと見える。そして、この瓦版がヒントになったのだろうか。今の「徳島新聞」の前身である「徳島民報」が三木さん達によって創始された。昭和24年、終戦後の阿波の地に、復興の新風が吹いたわけだ。

とにかく驚いたのは館のファイリングのすばらしさ。蔵書^{たふ}、太布、藍商の記録、酒商の記録、貴族院議員、国会議員の記録等すべてが、芸術的なほど美しく整理されている。このように情報を収集し、整理する力が過去^{ほんすう}を反芻し、現状に生かし、正確に未来を予測する力をはぐくんだに違いない。

三木家に伝来された、この時代を読む力と行動力は、機を生かし、次々と新しい産業を發展させた。その一環である阿波和三盆、太布作りの歴史を、別館の方で見せていただいた。阿波太布館には、コウゾやカジから作られたという太布が並べられている。国内でもここまで太布が見事に保存されているところは他にない。天皇に献上した^{あらたえ}という匳布^{ほっぴ}から職人の法被^{ほっぴ}まであり、製造工程や道具一式も展示されている。隣の和三盆館には、^{おおがま}大窯が砂糖精製の工程順に置かれている。牛の牽いた石車の柄が太い。

衣、食、住、文化、政治、金融、あらゆる事業を手掛け成功させた三木家代々の、機知と手腕と情熱に感動しつつ、屋敷門を出た。

近くにある浅草寺の分院も、三木家の方が建てられたという。境内にはソテツが鮮やかな朱色の実をつけ、北には三木林業の山脈が冬の日差しを浴びていた。

財団法人 三木文庫

- ◆開館時間：午前10時～午後4時
(ただし照会指定日制)
- ◆休館日：土曜・日曜・祝日・盆・年末年始
(12月27日～1月7日)
- ◆入館料：無料
- ◆交通案内：徳島バス鳴門下板線「広島」下車徒歩15分。11号バイパス「中喜来」下車徒歩5分。
- ◆所在地：徳島県板野郡松茂町中喜来字中須20-2
TEL(088)699-2414

鳥居龍蔵の残した資料

ほら たかこ
原 多賀子 (友の会会員)

徳島が生んだ世界的な人類学者鳥居龍蔵は、1870年(明治3年)4月4日、現在の徳島市新町橋のたもとに生まれました。感受性豊かな幼少期を徳島で過ごしたにもかかわらず、アジアを中心とした海外での研究成果があまりにも有名で、徳島での研究成果はあまり注目されず、郷里徳島ではその存在は薄れかけています。1892年(明治25年)22才の時にはさらに勉学に励むため、家をたたんで家族そろって東京に移住しました。そしてその生涯の大部分を調査に費やしたためか、鳥居龍蔵は知っていても鳥居龍蔵が徳島県出身ということを知らない人も多いようです。鳥居龍蔵の生家は今はなく、その後地の片隅にひっそりと石碑がたつのみです。

徳島出身の鳥居龍蔵は地元徳島の調査もしています。徳島市城山貝塚の発掘、鳴門を始め各地の古墳の調査、川内村史の監修等です。

徳島県では、いち早くこの偉大な学者の業績を顕彰するため、1965年(昭和40年)に鳴門市の妙見山山頂に鳥居龍蔵の収集品や遺品を収蔵した、お城の形の博物館を建設しました。徳島県立鳥居記念博物館です。それからちょうど40年がたった今年、その博物館において、企画展「再び、鳥居龍蔵を考える」が開催されました。

広く世界的な資料のみならず、身近な資料の展示もされています。今一度、郷土の偉大な学者の研究成果にふれてみませんか？



大正11年日記

友の会行事報告



自然体験
お米をつくってみよう

みやたけ まきこ
○宮武 眞佐子（友の会会員）

先日は本当にお世話になりました。この1年間、農業を経験したことのない私どもにいろいろとご指導いただき、「米」のことについて深く勉強し、実際に手にとって作業を終えた今、孫に良い実践教育が出来たとありがたく思っています。

このような機会を持たたことに感謝いたします。これからもどうかよろしく願い申し上げます。

みやたけ ともてる
○宮武 朋晃（友の会会員・小学校2年）

今までで一番楽しかったのは、だっこくの時、足でかきのペダルみたいなところをふむのはむずかしかった。でも米をもってひっくりかえしたりするのがおもしろかった。たまにまきこんだりしたけどやっぱりもって米をとるのがおもしろかった。たまに雨で米がぬれそうになってこめったけど、とてもそれが一番おもしろかったです。

田うえでこしがいたかったよ。それでお米を作るのがたいへんだとわかりました。



作業のようす

○さとう みほ（友の会会員・小学校1年）

田うえは、うえたいねをふまないようにするのが大へんでした。それと、どじょうをみのがしたのがくやしいです。あつい中の草とりは大へんだったけど、おこめさんにおおきくなってほしくてがんばりました。虫とりや、こふん見学や、とくにやきいもはとてもたのしかったです。台ふうがきたときはだいじょうぶかなあと心ばいでたまりませんでした。

いねかりでは、はじめてかまをつかってじぶんでかいてうれしかったです。だっこくもとてもたのしかったです。どんなふうにおこめができるのかわかって、一つぶものこさないでたべるようになりました。とてもたのしかったです。またチャレンジしたいです。

和三盆糖見学のようす



説明をきく参加者



子どもたちも熱心にきく

友の会行事報告



和三盆糖見学と藍染め体験

おおすぎ ようこ
○大杉 洋子（友の会会員）

1月22日10時上板町の「技の館」へ集合、隣の岡田製糖へおじゃまする。

なつかしい匂いに誘われて門を入る。入母屋の大きい母屋の前を過ぎ、甘蔗さとうきびの締め場へ「今終わった所です。朝が早いものですから。」搾しぼられた汁はパイプで煮詰める大きい釜へと運ばれる。搾り滓かすは集められ肥料とか紙の原料になるらしい。釜に集められた汁は灰汁あくを抜きながら煮詰められ白下糖になる。庭に積んである甘蔗がなくなるまでこの作業をする。

白下糖は順次水を加え蜜を抜く作業をする。布につつまてこみ梘子を使い締めてゆく。この工程を何度か繰り返し、和三盆になってゆく。梘子に使われている檜つやつやの木の棒は、縄でつるされる石の重みで溝ができ、艶々している。

甘蔗は4月に植え、12月に刈り取られる。上板の甘蔗は他所とは違って細く、甘みも強い。甘蔗は根の方へ行くほど甘いらしい。

この道60年という板東千代吉さんの手は指の節が高く、八つ手の葉みたいに大きい。そして技術保持者としてまたも東京で認定され表彰されるという。昼食後、技の館の藍染体験館へ。

しま みよこ
○島 美代子（友の会会員）

上板町の岡田製糖所見学に参加させていただきありがとうございました。伝統的な匠の技をじっくりと見学させていただき大きな感動と感謝の気持ちで一杯でした。阿波の素晴らしさを再確認いたしました。

博物館の方々の親切なご案内にも深く頭が下がります。これからも県内はもとより、県外の日帰りとか一泊の歴史を語る催しを期待しております。

なんぶ ようこ
○南部 洋子（友の会会員）

一度はぜひ見てみたいと思っていた和三盆糖作りの現場を見学でき満足しています。

昔ながらの薄暗い建物の中で、これまた昔ながらの道具を使って職人さんが熟練の技を目の前で見せてくれました。これが見学者のためのものではなくて、実際の和三盆糖作りの現場なのだということに感激しました。

みやたけ まさこ
○宮武 眞佐子（友の会会員）

岡田製糖所の見学に参加させていただきありがとうございました。子どもたちも大喜びで帰ってまいりました。お世話になりました。私は子どもたちに「食育」をしてやりたいといつも心がけておりますので、今後も食品工場見学とか製造工程が見学できる場所へ行けると良いと思います。

たかた
○高田 スミ子（友の会会員）

昨日は楽しく参加させていただきました。和三盆の歴史、精糖法など詳しく知ることが出来ました。また、地域の特産物を活用したレストランなど町おこしが定着した良い所を見せて頂き、ありがとうございました。

くさか しずよ
○日下 静代（友の会会員）

寒晴の一日、岡田製糖所で学ぶことが出来、ご案内くださった方々に御礼申し上げます。

今まで無関心であった和三盆糖を、この上なく大切にいただくようになりました。また、白下糖は吉野葛くずとも相性が良くとりこになっております。

さなか しずこ
○佐中 倭文子（友の会会員）

和三盆糖の説明を聞きながらの見学。サトウキビの搾り粕を有効肥料として大地に返していると聞き、私も少し頂いて畑に入れました。今年夏には甘いトマトができるそうなので楽しみにしています。

藍染めでは炭木靖さん（博物館学芸員）より前もって連絡いただいていたので、持参した綿シャツが予定より早く美しく染め上がりました。皆様お世話になりました。

友の会活動の紹介



八万町の地神塔を調べよう

せき まゆこ
関 眞由子 (友の会会員)

昨年実施した「八万の昔を探ろう (第1回) - 夷山から銅の鳥居への道 -」は、学芸員の磯本先生のポイントを抑えた温かなご指導と、事務局の熱意溢れるご協力を得て、たくさんの出会いと感動とともに終えることができました。ふだん気に止めることのなかった小さな祠や石塔も、近くに住む方々のお話を伺うことによって、それぞれに小さな歴史があることを知ることができました。

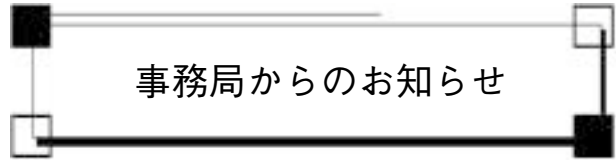
なかでも地神塔は、ほとんど在所ごとにあるといってもよく、今も祭礼が行われているところもあって、農業に携わる人々の間で篤く信仰されていることが分かりました。

そこで行事の補足として、地神塔の計測・聞き取り調査等を計画したいと思っています。調査結果については博物館ホームページに掲載することも検討中です。興味のある方のご参加をお待ちしています。

なお、準備段階でのご参加も大歓迎です。



祭礼のようす



事務局からのお知らせ

あなたの原稿待っています

この会報「アワーミュージアム」にあなたも投稿してみませんか？専門的な文章はちょっとねえとお考えの方も多いかとは思いますが、そこでまずは以下の項目で原稿をお寄せいただきたいと思います。

博物館紹介

- ・ご近所の博物館
- ・行ったことのある博物館 等 (県内外を問いません)

会員広場

- ・ご近所で話題になっているトピックス的なもの
- ・へえ〜というトリビア的なもの
- ・趣味やサークル紹介など

※小・中・高校生の方の原稿も大歓迎です。

- ・原稿は、はがき・FAXなど、どのようなかたちでも結構です。
- ・イラストや写真だけの投稿も歓迎します。
- ・投稿においては会員番号、氏名をお願いします。
- ・校正の段階で多少の加筆・修正をさせていただくことがあります。御了承ください。

行事スタッフ募集

友の会では行事のチラシの作成や、写真・ビデオ撮影等のスタッフとして協力いただける方を募集しています。

お友達・ファミリーでの参加も大歓迎です。

詳しくは友の会事務局までお問い合わせください。

No.27

徳島県立博物館友の会会報

アワーミュージアム

February—
2005
Tokushima
Prefectural
Museum



第27号

2005年2月28日 発行：徳島県立博物館友の会
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館内
TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197